

これでは凍土に没した犠牲者の霊も浮かばれない。日本人の器用に一驚を喫する功績の大偉業であるにもかかわらず、あまりにも無神経なのに啞然とする。

私の八カ所の収容所の流浪は、いろんな苦役に服する艱難辛苦の連続であった。食食は引揚船上まで波及する。司厨員の切る沢庵の頭と尻の切れっぱし、終わった途端に一齐に切屑めがけて躍りかかる態は、あたかも童心に等しい浅はかな醜行である。シベリアで如何に難儀したか推して知るべし。

戦友の平山氏から二人の人物が会いたいと申し出ている旨の伝達があり、船倉の一角へ急行。二人の若い船員が待機していた。笑顔で「お帰りなさい、長い間ご苦労さまでした」とねぎらわれる。首をかき「誰か」の尋問に「早崎浜の池崎厚男、大野利成」と名乗る。乗船名簿を見ての面会であった。意外な対面に喜びも一入であった。

大郁丸の乗組員で、両君は司厨員であった。再三眩しいほどの銀飯や色々の副食の差し入れあり、隣人へも分与して共に祖国の味覚に舌つつみを打つ。渴き

きった腹を満たす果報者であった。筆舌に尽くし難い思いやり深い供給で、至極満悦であった。下船の際は二人して二百円恵んでくれ、重々の厚恩、終生忘却出来ない印象深い感銘であった。感無量の恩情の熱涙にむせぶ救いの神であった。

明日は上陸という早朝、洗面に行った老軍曹は脳溢血で卒倒、逝去の悲報に接する。辛酸をなめ、折角祖国の土を踏まんとしているのに、妻子の喜顔も見ずして実に嘆かわしい次第である。

哀悼の意を表し黙禱を捧げる。

往時を偲ぶ

岐阜県 小川 太郎

満州第八九八部隊（関東軍衛生部幹部教育部）庶務課で動員並びに暗号担当兼少尉候補生のレントゲン教育助教として勤務していた私達に、昭和二十年八月十一日、兵站病院及び野戦病院各一を編成の動員下令あ

り。両病院を編成（教育部部員・軍医候補生・下士官候補者以上全部衛生部員）、資材機具の補充を完了。八月十四日夜、輸送列車を確保し関東軍司令部の転進先の通化に向け移動。途中、四平駅において同駅駐屯の憲兵より終戦の玉音放送があった旨通報あり。通化着後軍司令部と連絡、終戦を確認の上、所持していた行李の動員、暗号その他極秘書類一切を焼却処分した。

その後司令部から「野戦病院は通化に残り（院長柴田久軍医大尉・昭和二十一年二月三日通化事件に参画後銃殺刑）、兵站病院は平壤に移動、病院を開設」の命を受け列車により転進、平壤中学に兵站病院を開設、兵員と日本人難民の医療業務を開始した。私は引き続き兵站病院の庶務担当となり、平壤及びその近郊にある各部隊への連絡並びに平壤市内在留邦人の情報入手の任務に当たった。

十月の終わりに武装解除され、即日、准士官以上を除く下士官・軍医候補生・下士官候補者等四百余と共に三合里収容所に入り、翌日収容所入りした飛行場設

定隊（隊長松田大尉）と合流、第二十九大隊を編成、庶務担当となった。越冬準備のため廠舎の雨どいを集め、これを用い手鋏一丁でストーブと煙突を作り、大隊副官の吉川中尉・庶務担当の鈴木曹長・同小生の三人が暖を取り飯盒炊さんを二カ月くらい続け、窮すれば通ず……を实践した思い出がある。この間に私と行動を共にした元兵站病院要員の大半は、他の大隊の補充要員や秋乙や飛行場への使役等に転出して行った。

二十一年一月、鈴木曹長と共に第十九大隊に編入され、徳田中隊第二小隊長として咸境南道興南港の近くにある日本窒素社宅柳亭里収容所へ移動、ここにてしばらく貨物船の物資積み下ろしの労役をさせられた。工場内の機械器具は言うに及ばず、敷設の引込線のルールまでも取り外してソ連に運ぶ火事場泥棒的行為には、驚き呆れたものである。

独立に沸き立つ朝鮮の人々はこの現状を知るや、一人立ち出来る頃には丸裸“

五月、興南港発、沿海州にあるポセツトに上陸、徒歩で道路沿いに並んでいる各種火砲を横目に眺めウラ

ジオストックに至り、一夜露営の後、お定まりの貨車に詰められ、馬匹にも劣る延々三十日の列車輸送で下車したところはウズベキスタンのグリーンチマザールという田舎駅。油田開発を始めて間もない高原地帯であった。翌日からどのような取り扱いを受けるか判らないので、小隊長以上が会合し、如何なることがあっても全員が助け合い守り合つて、故国の土を踏む日まで、犠牲者を出さぬよう注意を払うことを約した。

我々に課せられた労役は、油田に至る道路構築、油田従事者の住宅建設であり、ノルマ、給与、環境等すべて劣悪であったが、朝鮮から携行してきた若干の物資で細々とつないだ。四カ月ほどはレンガ造り、建物の基礎コンクリート打ち、二階建て住宅のレンガ積みに従事、その後フィンランド製木造組立式二階住宅（フィニスキードーム）建設に従事、六棟を完成した。

ある日、建築工事中、完成家屋の方角で銃声がしたので疑念を生じ見回ったところ、我々に同行していたソ連兵が己の銃を用い自殺未遂をしているのを発見。他のソ連兵を呼び現場を確認させた上、戸板を用いて

我々の手で病院へ送致した。その日の夕刻収容所長に呼び出され、この件について尋問を受け、事細かに説明、現場を確認したサルダートに聞くよう要請したが、該当する者がいないと、あたかも私が犯人であるが如き疑いを持たれ二晩呼び出された。三日目の朝、現場検証のため呼び出され、収容所の門まで出向いたところ、事件の日現場確認をしたソ連兵がいたので収容所長にこの兵を引き合わせたところ、所長もすべてを了解し簡単に現場検証をして終わり。収容所長は疑いを持ったことをわび、煙草や菓子等を兵に届けさせ一件落着。ちなみに自殺未遂の兵は、同輩に恋人を取られ失意のあまり銃を使用したもので、翌日病院で息を引き取った由。現場確認を報告しなかった兵は、間もなく他へ転属したと聞いた。

グリーンチマザールの労役は一年で終わり、大隊長以下三個中隊はベゴワード第五収容所に移送され発電所用運河の建設工事に一年有余の間従事した。この間私共の作業隊は鉄筋工・砂利採取・運河の掘削・橋脚のベトン工事・運河の堤防構築・新設運河からの農業用

水取入種管理設・湛水池の構築等多様な土木工事を経験した。

俘虜生活の間ベゴワードに移るまでは旧軍隊の編成ですべての行動をして何ら問題もなく過ごしたが、ベゴワードに移ってからは、二人の日本人が入って来て共産主義を説き、第二の祖国ソ連のため献身せよと、いつ帰国できるかもしれない不安の毎日を過ごしている同胞を追い立て、ダモイを餌に駆り立てていた。冷静に彼らの言動を観察すれば、ソ連政府の策謀による日本人の思想改革と苛酷なノルマの完遂による疲弊したソ連の復興の目的完遂のため、甘言に乗せられ躍らされている輩で、日和見主義者が多く、労働に従事することもなく、汗を流す同胞の上に胡坐して思想改革と苛酷な労働を強要、六十万余の日本人を苦しめた横暴は誰しも終生忘れ得ないであろう。

昭和二十三年十月末、大隊長と通訳外若干名と別れ、帰還のため貨車の上の人となり、十二月三日、帰還船遠州丸（復員二千三百人）により八年ぶりに日本の土を踏んだ。

入ソ時に申し合わせた全員無事帰国させる約束は、私よりも年長の者九〇パーセント。二十年八月四日召集の軍隊生活の経験も乏しい者ばかりがお互いに励まし助け合って過ごした結果、病死一人、作業中の事故死一人を出したが、他の者に過度の病人もなく全員帰国出来たのは幸いであった。

復員後五十一年、苦勞を共にした友も大半が他界され、私と行動を共にした者も十人足らずとなった。

異国の地に眠る幾多の霊に想いをいたし筆をおきます。

シベリア抑留記

静岡県 佐藤 定 衛

私は、大正七年十月一日に生まれた。長男が幼かったので母が婿を取り家を継いだのであるが、私が生まれた頃に父が死んだので、母は私を祖母に預けて他村に嫁いでしまった。祖父はなく、私は祖母に育てられ